

小惑星探査機 はやぶさの大冒険

山根一眞 著

2010年6月13日(日曜日)は、日本全国各地に興奮した日を迎えた。2003年5月9日に地球を飛び立って、宇宙で7年の歳月をかけて数々のミッションをこなしてきた「はやぶさ」が帰還した日だ。オーストラリアの広大な砂漠地帯に閃光を伴って地球に帰ってきた。

「はやぶさ」は、小惑星探査機として打ち上げられ、小惑星「イトカワ」の物質の一部を採取して地球に帰還したのである。この打ち上げから帰還までのプロジェクトを克明に取材し発表したのが当著書である。

著者である山根一眞氏は、NHKキャスターを7年勤め、現在獨協大学経済学部特任教授であるが、宇宙航空研究開発機構(JAXA)の囑託でもある。また、「メタルカラーの時代」など多数の著者としても有名である。

著者は、「はやぶさ」のプロジェクトを率いたJAXAのプロジェクト・マネージャーである川口淳一郎教授を始め、多数の科学者・技術者に自ら直接取材し、その豊富な資料を基に、中学生にもわかり易く「はやぶさ」の航行記録を展開している。さらに、大人でも童心に戻って、わくわく、はらはら、やきもきするような情報や苦勞話を時系列的に読者に提供してくれる。

著者は、「はやぶさ」の打ち上げ時には内之浦で見送り、帰還時にはオーストラリアのウーメラ砂漠で劇的な瞬間を見届けた証人でもある。著者が科学技術、ものづくりにこれほどまでのめり込む理由は、自著の「メタルカラーの時代」で納得できる。当著書でも下町の工場でしか出来ないものづくりの視点での記述を忘れてはいない。

技術面では、打ち上げのMV5ロケットや宇宙空間で活躍したイオンエンジン、試料採取のサ

ンプラーホーン、地球スウィングバイなどについてわかり易く説明を加えている。

「はやぶさ」が7年もの歳月をかけて60億キロの過酷な「いとかわ」への旅を終え、満身創痍になりながらも地球に帰ってきたことは、世界でも初めての偉業である。途中で行方不明となりながらもスタッフの粘り強い捜索で見つけ出すくんだり(第8章「行方不明の冬」)は、正にはらはらす思いになるだろう。

ここで一部抜粋であるが、著者と川口教授の含蓄のある言葉を紹介する。

『『おもしろい』という思いはとても大事。『おもしろい』とは好奇心をかきたてられることであり、それが文化や文明の最大の原動力となってきた。宇宙分野に限らず、日本の最先端の科学技術者たちも、ものづくりにたずさわる人たちも、『おもしろい』からこそ努力をして世界一の成果を手にしてきたのだ。』(第10章「大星空から『さようなら』」)

また、川口淳一郎教授は、

「このプロジェクトを通じて国民のみなさんが、日本人はもっと自信や希望を持てるんだという力を得る一助になってくれればと願っています。成功は幸運でした。あるところまでは科学や技術の努力でできますが、それより先はどうしようもない領域です。それを乗り切ったのは『根性』だと思います。」(第11章「おかえりなさい」)

著者は、「『はやぶさ』のことを知れば知るほど、だれもが熱くなるのである。」と締めくくっている。この熱が、「世界一の成果」と「根性」を基に、後継機「はやぶさ2」の成功に向けられることを期待したい。

当著書は、手軽に読める本だが読者に必ず感動をもたらしてくれる。ぜひ、中学・高校生にも読ませたい本である。

(マガジンハウス、295頁、1,300円)(田中正一)